

# 柏木教会月報

東京都新宿区北新宿3-1-18

☎03-3368-2156

牧師 大浦 勝

## 隣人を愛する

ルカによる福音書一〇章二五～三七節

牧師 大浦 勝

「さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」

(三六節)

ある律法の専門家が「わたしの隣人とはだれですか」とキリストに尋ねた(二九節)。神はわたしたちに、「隣人を自分のように愛する」ことを求めておられるとすれば、まずその隣人とはだれのことであるかが定義され、どこかに隣人とそうでない者を区別する線が引かれなければならぬ、と彼は考えたのである。

キリストは律法の専門家のこの問い合わせに答えて、善いサマリア人のたとえ話をされた。追いはぎに襲われ、半殺しの状態で道端に放置された人は、明らかにユダヤ人であろうが、祭司もレビ人も同胞であるユダヤ人を見捨てて、道の反対側を通つて行く。彼らには、直ちに彼を助けることができない理由があつたのである。わたしたちもこのような場合、まずこの人を助けることができない理由を探す。そして、その理由はいつでも見つけることができる。

ところがそこを通りかかったあるサマリア人は、この人の側に近寄り、その惨めな状態を見て、あわれみに心を動かされ、傷の手当をし、宿屋まで連れて行って、宿

屋の主人に彼の介抱を頼むと共に、必要な費用を支払うことを約束する(三五節)。このサマリア人は、傷付き、倒れている人を助けるという重荷を負い、そうすることを自分が果たさなければならない義務と見なした。

律法の専門家は、「だれが自分のように愛すべき隣人であるか」を尋ねたのであるが、キリストはむしろ、「だれが助けを必要としている人の隣人となつたか」と問いか返される。わたしたちは、愛さなければならぬのはだれで、だれに対してはそうする必要がないかを問うのであるが、キリストは、わたしたちが助けを必要とするすべての人に対して、それがだれであれ、その人を助ける隣人となるべきことをお教えになる。

キリストはそのためにあえて、日頃ユダヤ人が軽蔑し、敵意を抱いていたサマリア人を登場させておられる。このサマリア人は、半殺しの状態で道端に横たわっていた人を、反目し合つてゐるユダヤ人としてではなく、自分の助けを必要としているひとりの人、自分を愛するようになすべきひとりの人と見たのである。わたしの助けを必要としている人、それはたとえわたしの敵であつても、その人は自分のように愛すべきわたしの隣人である。

古代教会以来聖書注解者たちは、キリストこそこの善いサマリア人であることを指摘してきた。罪の中で傷付き、倒れふしているわたしたちを癒し、赦し、立ち上がりさせるために、キリストは来てくださり、救いのみわざをおこなつてくださった。この「善いサマリア人」の助けと奉仕を受けたわたしたちは、ひとりの小さな、善いサマリア人となつて、その第一歩を踏み出すのである。